

# 平成23年度沖縄群島病虫害発生予報第12号(3月予報)

## I 3月の気象予報

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	気 温	降 水 量	日 照 時 間
高い(多い)	40	40	20
平 年 並	40	40	40
低い(少ない)	20	20	40

(平成24年2月24日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

地点別の平年値

	平均気温(°C)	最高気温(°C)	最低気温(°C)	降水量(mm)	日照時間(h)
沖縄群島(那覇)	18.9	21.7	16.5	161.4	108.3

(沖縄気象台発表・統計期間1981～2000・資料年数30年)

## II 3月の発生予報および防除上の注意事項

### 1 さとうきび

- 生育初期におけるメイチュウ類の防除対策
  - a 2月下旬の調査の結果、夏植圃場での芯枯茎率は9.3%であった。
  - b 圃場内外のイネ科雑草は発生源となるため、除去する。
  - c 植付時や培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選定し施用する。
  - d 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、生育初期の防除を徹底する。
  - e 平成23年度病虫害発生予察注意報第2号(平成23年12月28日付)参照。
  
- 収穫後圃場におけるカンシャコバナナガカメムシ(ガイダー)の防除対策
  - a 収穫の際に地上に落下した卵や越冬成虫は地表や株元に残存し、収穫後の株から伸びた幼茎などで生育する。
  - b 卵の死亡率を高め、第1世代の発生を抑制するため、収穫後は耕耘および株出管理を速やかに行う。

### 2 マンゴー

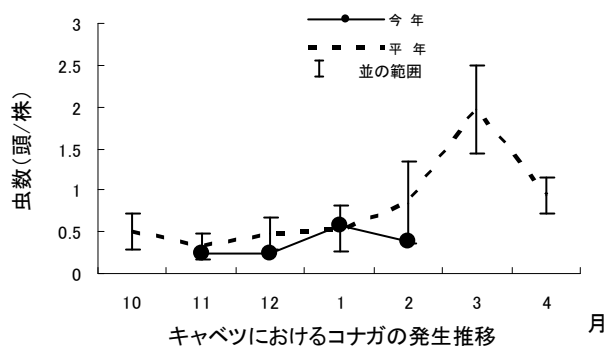
- 炭疽病の防除対策
  - a 2月中旬の調査の結果、一部の施設で炭疽病の発生がみられた。
  - b 本病の病原菌は花芽、花序、葉などにすでに潜在感染していることが知られており、収穫果実への被害軽減のため、今後袋がけ前までの防除対策が重要である。
  - c 罹病した新鞘、残渣は速やかに施設外に持ち出し処分する。
  - d 開花～結実期には予防効果のある薬剤を選定し、定期防除に努める。

### 3 キャベツ

#### (1) コナガ

発生程度 : 並  
予報の根拠

2月下旬の調査の結果、株当たり幼虫・蛹数は0.4頭(前年0.2頭、平年0.8頭)で平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

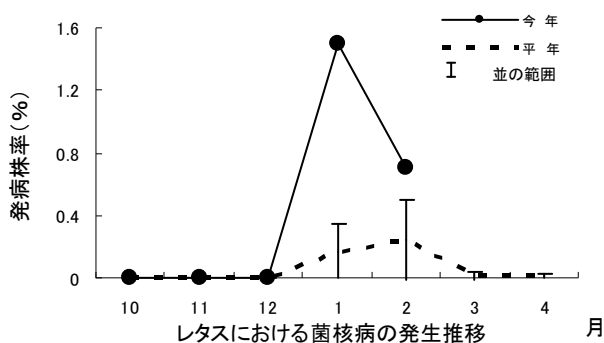
- 圃場周辺のアブラナ科雑草の除去および収穫後の残渣処理を徹底し、圃場管理に努める。
- 多発すると防除が困難になるので、低密度時に薬剤防除を行う。
- 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

### 4 レタス

#### (1) 菌核病

発生程度 : やや多  
予報の根拠

- 2月下旬の調査の結果、発病株率は0.7%(前年0.1%、平年0.2%)と平年よりやや高かった。
- 本病は低温曇天下で発生しやすい。気象予報によると向こう1か月の日照時間が少ない確率が40%と予想されており、本病を助長すると考えられる。



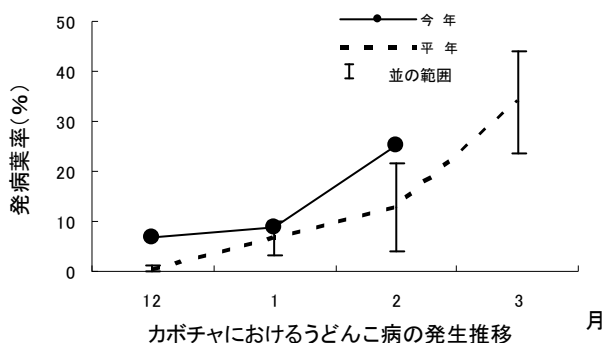
<防除上注意すべき事項>

- 発病株は菌核を生じないうちに除去し、ビニール袋に入れるなどして密閉処理し、圃場外へ持ち出し処分する。
- 例年発生時期に当たるので、予防防除に努める。
- 平成23年度病害虫発生予察技術情報第9号(平成24年2月1日付)参照。

## 5 かぼちゃ

- (1) うどんこ病  
 発生程度 : やや多  
 予報の根拠

a 2月下旬の調査の結果、発病葉率は25.4%(前年29.6%、平年12.8%)と平年よりやや高かった。



<防除上注意すべき事項>

- 株元の老葉を除去し、透光・通風をよくする。
- 多発すると防除が困難になるので、葉の表裏をよく観察し、早期防除に努める。
- 着果後は防除を徹底し、収穫時まで出来るだけ多くの健全葉を確保する。
- 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

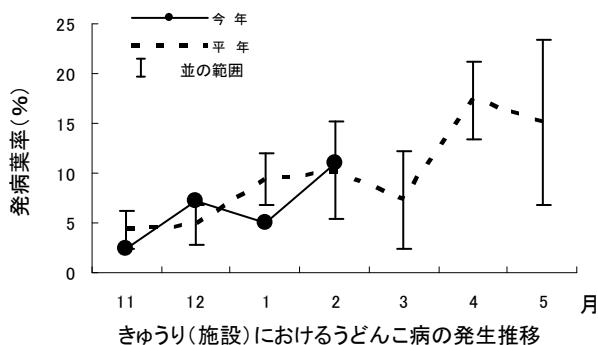
- モザイク病の防除対策

- 2月下旬の調査の結果、発病株率は0%(前年3.2%、平年1.7%)であった。
- 媒介虫であるアブラムシ類の葉当たり虫数は0.62頭(平年0.62頭)と平年並であったが、有翅虫の割合が高かった。また、発生圃場率は100%であった。
- 圃場周辺の雑草はアブラムシ類の発生源になるので除草を行う。
- 発病株は発生源となるので、見つけ次第抜き取りビニール袋に入れるなどして密閉処理し、圃場外へ持ち出し処分する。
- 本病は汁液伝染するので、ハサミや手の消毒、洗浄を行う。
- 収穫後の残渣は発生源となるので速やかに片づける。
- 平成23年度病害虫発生予察技術情報第8号(平成23年12月28日付)参照。

## 6 きゅうり(施設)

- (1) うどんこ病  
 発生程度 : 並  
 予報の根拠

2月下旬の調査の結果、発病葉率は11.0%(前年30.8%、平年10.2%)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

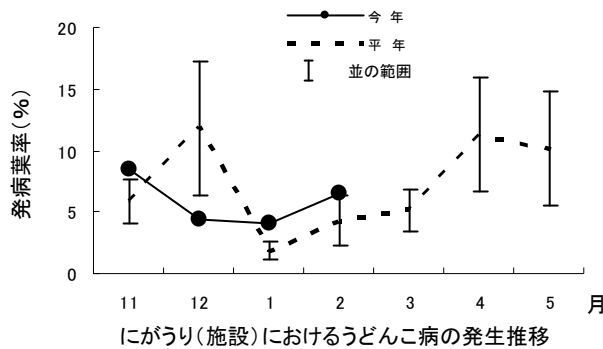
- 過繁茂を避け、透光通風を良くする。
- 老葉や病葉は発生源となるので、圃場内に放置せず、ビニール袋に入れるなどして持ち出し処分する。
- 多発すると防除が困難になるので、早期発見・早期防除に努める。
- 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

- 黄化えそ病の防除対策
  - a 2月下旬の調査の結果、発病株率は4.3%であった。また、一部圃場で多発生がみられた。
  - b 着果前の発病株は、見つけ次第抜き取り処分する。
  - c 媒介虫であるミナミキイロアザミウマの防除を徹底する。
  - d 施設内外の雑草は、ミナミキイロアザミウマの発生源となるので、除草に努める。
  - e ミナミキイロアザミウマは薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

## 7 にながり(施設)

- (1) うどんこ病  
 発生程度 : やや多  
 予報の根拠

2月下旬の調査の結果、発病葉率は6.5%(前年7.0%、平年4.3%)と平年よりやや高かった。

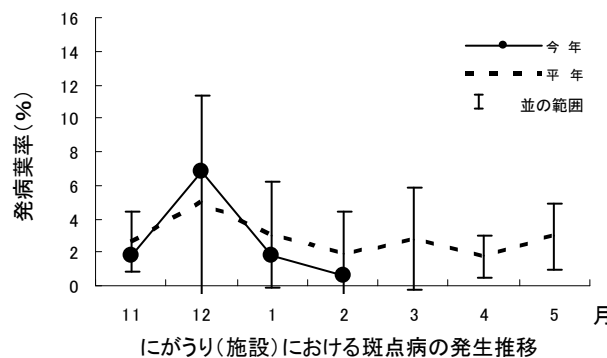


### <防除上注意すべき事項>

- a 過繁茂を避け、透光通風を良くする。
- b 老葉や病葉は発生源となるので、圃場内に放置せず、ビニール袋に入れるなどして持ち出し処分する。
- c 多発すると防除が困難になるので、早期発見・早期防除に努める。
- d 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

- (2) 斑点病  
 発生程度 : 並  
 予報の根拠

2月下旬の調査の結果、発病葉率は0.6%(前年17.0%、平年1.9%)と平年並であった。



### <防除上注意すべき事項>

- a 老葉や病葉は発生源になるので除去し、圃場外に持ち出して処分する。
- b 過繁茂を避け、透光通風を良くする。
- c 多湿にならないよう、施設内の換気に注意する。
- d 葉をよく観察し、初期防除を徹底する。

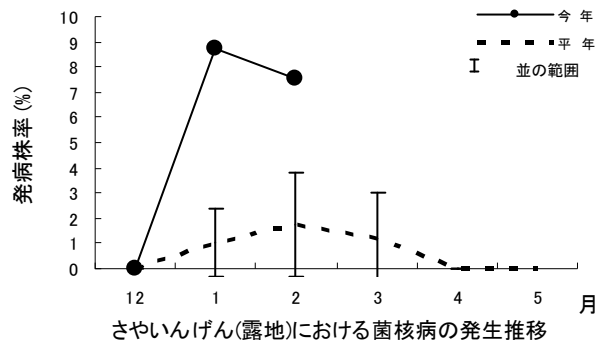
- ウイルス病の防除対策
  - a 2月下旬の調査の結果、一部の施設で葉にモザイク症状がみられた。
  - b 着果前の発病株は見つけ次第抜き取り処分する。
  - c 施設内外の雑草は、本病の感染源および媒介虫であるアブラムシ類の発生源となるので、除草に努める。
  - d アブラムシ類の防除を徹底する。

## 8 トマト

- トマト黄化葉巻病の防除対策
  - a 2月下旬の調査の結果、本島南部の一部施設で多発生がみられた。
  - b 発病株は感染源となるため、早急に抜き取る。抜き取った株は必ずビニール袋に入れるなどして密封し、圃場外へ持ち出し処分する。罹病株から収穫を続ける場合は、媒介虫であるタバココナジラミの防除を徹底する
  - c 施設内外の野生生えトマトは、本病の感染源および媒介虫であるタバココナジラミの発生源となるので、抜き取り密封処分する。
  - d 黄色粘着テープ等により、タバココナジラミの早期発見・早期防除に努める。
  - e タバココナジラミの薬剤防除を行う場合は、マルハナバチに影響の少ない薬剤を選定する。

## 9 さやいんげん(平張り)

- (1) 菌核病
  - 発生程度 : やや多
  - 予報の根拠
    - a 2月下旬の調査の結果、発病株率は7.5%(前年12.8%、平年1.8%)と平年より高かった。
    - b 気象予報によると向こう1か月の日照時間が少ない確率が40%と予想され、本病が発生しやすい状況にある。



### <防除上注意すべき事項>

- a 発病部位は、菌核が形成される前に早めに除去し、ビニール袋に入れるなどして圃場外へ持ち出し処分する。
- b 多湿時に発生しやすいので、老葉は取り除き透光通風を良くする。
- c 例年発生時期に当たるので、予防防除に努める。
- d 平成23年度病害虫発生予察技術情報第9号(平成24年2月1日付)参照。

## 10 小ぎく(彼岸出荷用)

- 白さび病の防除対策
  - a 2月の調査の結果、発病葉率は0.2%(前年0%)、発病度は0.07であった。
  - b 気象予報によると向こう1か月の降水量が多く、気温が高い確率がともに40%と予想されており、本病の発生が助長されやすい。
  - c 多湿条件下で発生するので、不要な下葉、脇芽は除去し、通風をよくする。
  - d 発病葉は除去し、ビニール袋に入れるなどして圃場外に持ち出し、焼却などの処分を行う。
  - e 発生時期であるので、葉をよく観察し初期発生を見逃さない。
  - f 防除効果を高めるため、薬剤耐性菌が発現しないようローテーション散布を行う。
  - g 栽培終了後は近隣圃場や次作の発生源にならないよう、不要な株は速やかに処分する。
  
- ハダニ類の防除対策
  - a 2月の調査の結果、発生圃場率は38.9%(前年27.8%)、寄生茎率は15.6%(前年12.4%)であった。
  - b 本県で発生の確認されている種はナミハダニ黄緑型である。
  - c 発生源となる圃場内外の雑草を除去する。
  - d 多発すると防除が困難になるので早期発見・早期防除に努める。
  - e 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。